

「落語と私」 その拾九

三代目 橘ノ百圓

この月報7月号が、皆様のお手元に届くのは、当然7月の初旬ですよネ！テェ事は、6月28日の「木材会館拾周年記念落語会」が終って、1週間経っている訳で、この原稿を書いている時は、私、橘ノ百圓は、只ただその日への期待と不安を抱えて、ペンを執っている訳です。事務局からの事前の報告では「5月末で、300席を越えました」との事で、皆様への感謝の気持ちと同時に、ホッとしております。まだ終った訳では無いのですが、篤くお礼を申し上げます。当日の結果報告並びに反省は!?次号で述べる事と致しまして、今回は、5月26日(日)に西新宿に有る「芸能花伝舎」で開催されました「芸協らくごまつり」の事を書こうと思います。この芸協まつりも、今回で13回を迎えました。第1回も同じ場所で、10月の第3日曜に開かれましたが、その時は圓師匠もお元気で、師匠の出身が山形県テェ事で、芋煮鍋を出店して、私も朝からお手伝い致しました。私が朝10時前に顔を出した時には、オカミさんを中心に2人の娘さんと、3人の弟子達が圓師匠の指示でテキパキと仕事をしておりました。私の第一声は当然「遅くなってスビバセン」です。そこは優しい師匠の事ですから「挨拶はいいから、早く働け！」テな訳で、鍋を覗くと美味そうに煮えた里芋の他に、牛肉(山形の特産品は、ABCと言い、Aはリンゴ、Bは牛肉、Cはサクランボなのです)、葱、牛蒡等が直ぐにでも食べられる状態でグズグズ煮えていたのです。その隣には、胡瓜を割箸に刺し、氷で冷した“冷し胡瓜”これが飛ぶ様に売れました。百圓!だったかな?芋煮が発泡スチロールのお椀1杯が200円?他に何を出したかは忘れまして。デッ師匠に「私は、何を遣れば良いのですか?」と伺いましたら、「お前は商人なんだから、会計を任せる」これがなかなか忙しいのです。お釣が大変、途中から長女順子ちゃんの友達も加わり、段々熱をおびて、仕舞いには前を通る人達に声を掛けたりで、3時前には全て売り切れ、サテ、勘定合せですが、正解金額が在る訳では無いのでその点は楽でした。店を閉めてからが大変!オカミさんがボヤく事、ボヤく事、昨日早くから芋の皮を剥き、葱と牛蒡の準備、牛肉の支度、それから出汁と醤油等で下拵、その上胡瓜を割箸に刺す仕事、又それらの品と大きな鍋を八潮の店から、お客様の車で西新宿まで運ぶと言う大仕事が待っている訳ですから、当然師匠は総監督、口は出すけど手は出さ無い、オカミさん曰く「今日の朝方まで忙しくて、来年は絶対に遣ら無いからネ!」オカミさん、お疲れ様でした。次の年からは、本当に出店は有りませんでした。後で聞いた話しですが、大分赤字になった様です。テな訳で、始めの頃は、各噺家さん達が工夫をして店を出していたのですが、近頃はプロの方達の屋台、噺家さんの店で、飲み物、食べ物が色々と揃っていますので、1日楽しく過せますヨ。5月26日当日は、カミさんと新宿で待ち合せまして、



会場到着が13時頃、直ぐに有料イベントのホール寄席の入場券購入の為の列に並びまして、この四部の開演が14時45分ですので、この間をどう過すかテエ事になり、ザッと会場を見て廻り、何人かの噺家さんと挨拶を交す事が出来ました。建物内の教室前を通りましたら、出噺子の音が聞えましたので、中に入ると「落語鳴物教室」の実演中で、立ち見でしたが数曲聞く事が出来ました。進行役が、瀧川鯉昇師匠の弟子で、二ツ目の鯉丸さん、太鼓番が九代目雷門助六師匠の所の二ツ目、音助さん、笛と鉦の担当は桂小文治一門の、桂小すみさん、そして三味線がまだ若い、井手雀泉さん、とにかく若い人達ばかりですから、会場に入った時から活気を感じました。先ず鯉丸さんは各噺家さんの出噺子の説明と、それに関する話題などをテンポ良く語っていました。私達が入ったのが終りの頃で、前半に太鼓の手の説明が在ったとみえ、鯉丸さんが「では、終わりが近いので、チャンとした太鼓の手をお願いします」と、先代と現三平師匠が遣っている、「祭りばやし」これは太鼓番の音助さんの腕の見せ処で、左側に平胴、右に締太鼓を置きまして、一人で叩くのですから・・・、実に心浮きうきする曲です。お決りの砂切を叩きますと、三味線の雀泉さんが軽快に“祭りばやし”を弾き、音助さんは二ツの太鼓を間を外さない様に聞かせる訳ですから、終わった時には盛大な拍手が起きました。その後体験教室で、一人の女の子を選び実際に太鼓に触れてもらい、無事に終わると鯉丸さんが「最後に寄席で真打が登場する時の“中ノ舞”でお開きにしたいと思います」テな事で、それまで篠笛を吹いていた小すみさんが、能管に持ち換えて、三味線、太鼓、笛が一体となって厳かに“中ノ舞”を(少々大仰ですネ)これが終わると、音助さん一人で“追出し太鼓”。皆さん、お疲れ様でした。実に良かったです。久し振りに会う音助さんに挨拶をして、次の太神楽教室の列に並びました。限定50名、無事入場出来ましたが、この教室は※色物の鏡味正二郎さんによる体験教室で、お客様の中から希望者を募り、実際に遣ってもらうのですが、先ずは“立て物”が二ツの体験の後に正二郎さんが“立て物”で演ったのが皿廻し、芯棒を出刃包丁に換えて、その数を3本まで増し、観客にバカな緊張を与える芸！考えてください。奇数と言う事は真中の包丁の刃は、正二郎さんに向いている訳ですから、緊張しますよネ！次が“廻す物”これはお馴染の傘の上に物を乗せて廻す芸ですが、始めに、お客様に紙風船を乗せて、締めはいつもの様に傘の上で杵を廻して「お客様のお金回りがマスマス良くなります様に」でお開きでした。太神楽をこんな間近で見たのは初めてです。ここの終わりが14時20分頃、もう一度ブラッと一廻りしてホール寄席の列に並びましたが、少しだけ待って入場する事が出来、下手側の前から3番目に座りました。開演30分前に一番太鼓が入り、5分前には二番太鼓と会場の雰囲気盛り上げて行きます。始めに登場したのが、今年の5月1日から、真打披露興業を打っております、橘ノ双葉改め、三遊亭藍馬“春の小川”の出噺子で軽快な足どりで高座へ、前振りに身の上噺をした後に新作の「街かどのあのこ」を12、3分、続けて色物として出て来ましたが、「落語鳴物教室」の笛方、桂小すみさん、教室での揃いの浴衣とは違い、小紋？の着物に三味線を持っての高座ですから、その堂々とした姿に、始めは判らなかつたのです。幾つかの俗曲の後に、三味線による“櫓太鼓の曲弾き”イヤ、実に良い物を聴かせてもらいました。彼女も、うめ吉さんと同じく、お噺子として平



太神楽

出典：日本文化いろは事典

http://iroha-japan.net/iroha/C04_vaudeville/01_daikagura.html

成15年に芸協入り、平成29年に音曲師として、小文治一門に移り1年の前座修業を経て高座に上っている訳ですから、腕は確かです。その後に、笑点で良く知られている三遊亭小遊三師匠、やはり、拍手の音が違いますネ。根多は“六郷駕籠”(蜘蛛駕籠の前半部)場内を大いに笑わせて高座を下りました。来年も5月24日(日)に、同じ場所で開催されますので、是非行ってみてください。損は無いですよ。

「落語豆知識」

※「色物」

落語中心の寄席では、落語以外の出し物を色物と呼びますが、これは、寄席の看板に出演者を書く時に、落語は黒い墨で、外の芸は朱墨で書く処からそう呼ばれたと聞いてますが、先代(十代目)文治師匠は「噺家は高座に黒紋付で上がるが、外の芸人さん達は、黒以外の色の着いた物を着るので、色物テェんだ」テな説明を聞いた事が在りますが、真偽のほどは、判りません。

色物の代表的なものは、

漫才、奇術(マジック)、俗曲、太神楽、紙切り、もの真似、独楽まわし・・・他沢山有りますが、やはり寄席はこの構成が上手くいって、体の疲れも無く、お客様が満足してお帰りになるのだと、私は思っている次第です。